

第6講座 古文

要点的まとめ

◆歴史的かなづかいの原則

(1) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」と読む。

例 あはれ→あわれ こひ→こい (恋) いふ→いう (言う)

(2) 「ゐ」「ゑ」は「い」「え」と読む。

例 ゐる→いる (居る) こゑ→こえ (声)

(3) 「ぢ」「づ」は「じ」「ず」と読む。

例 もみぢ→もみじ みづうみ→みずうみ (湖)

(4) 助詞以外の「を」は「お」と読む。

例 をとこ→おとこ (男)

(5) au・iu・eu・ouと母音が連続するときは、ô・yû・yô・ôと読む。

例 やうす [yâusu]→ようす (様子) [yôsu]

◆古文の読み方

(1) 古語の意味を正しくつかむ。

古語 (古文で使われている言葉) には、現代語と形は似ているが、意味が異なるものがあるので注意する。

例 あやし≡不思議だ うつくし≡かわいらしい・いとしい

(2) 省略されている主語や助詞を補う。

古文では、主語や助詞が省略されることが多いので、補いながら読み進める。

例 「竹取の翁たけとりのおきなといふものありけり。……あやしがりて、寄りて見るに、筒つつの中光りたり。」→「竹取の翁という者がいた。……(竹取の翁が)不思議に思つて、近寄つて見ると、筒の中が光っている。」

文の成分・文の組み立て

(1) 次の——線部を漢字に書き直しなさい。

① 図をかくだする。

② 海底をちようさする。

③ ひみつを守る。

④ 銀行にお金をあずける。

⑤ 川に魚をはなす。

⑥ 誕生日をいわう。

(2) 次の各文の主語に——線を、述語に~~~~線を引きなさい。

① これが私の家です。

② 夕焼けがとても美しい。

(3) 次の各文の——線が修飾している文節に~~~~線を引きなさい。

① 広い草原が続いている。

② ぎらぎらと太陽が輝く。

(4) 次の各文の——線部の文節どうしの関係をそれぞれあとから選びなさい。

① 月と星を見た。

② 一生懸命生きていく。

ア 主・述の関係

イ 修飾・被修飾の関係

ウ 並立の関係

エ 補助の関係

★印は、単元内容に特に関連する問題です。

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

花の咲き散る折ごとに、乳母亡くなりし折ぞかしとのみ、あはれなるに、^①同じ折亡くなり給ひし侍従の大納言の御女の手を見つ、^②すずるに
[A]なるに、五月ばかりに、夜ふくるまで、物語を読み起きてきゐたれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいとなごう鳴いたるを、驚き見れば、^③いみじうをかしげなる猫あり。いづくより来つる猫ぞと見るに、姉なる人、あなかも。人に聞かすな。いとをかしげなる猫なり。飼はむ。とあるに、いみじう人馴れつつ、かたはらにうち臥したり。

（菅原孝標女『更級日記』）

〔現代語訳〕

（桜の）花が咲いたり散ったりする季節が来るたびに、乳母が亡くなったところだなあと、そのことだけが思い出されて、しみじみとした気持ちになるのだが、同じころお亡くなりになった侍従の大納言の姫君がお書きになったものを見ては、むやみにしみじみとした気持ちになっていると、陰暦五月ごろに、夜がふけていくまで、物語を読んで起きて座っていると、どこから来たのかわからないが、猫がたいそうおだやかに鳴いていたのを、驚いて見ると、[B]かわいらしい様子の猫がいる。どこから来た猫かしらと（思って）見ていると、姉が、「しつ、静かに。人に聞かせてはいけませんよ。とてもかわいらしい猫ですね。（私たちで）飼いましょう。」と言うと、たいそう人に慣れて、そばにうずくまっていた。

問一 線①「同じ折」とありますが、季節はいつごろですか。漢字

一字で書きなさい。

問二 線②「手」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、

記号で答えなさい。

- ア 手形 イ 手柄
ウ 筆跡 エ 遺跡

問三 [A]にあてはまる言葉を古文中から三字で書き抜きなさい。

問四 線③「いづくより来つる猫ぞ」の現代語訳にあたる部分を書き抜きなさい。

問五 [B]にあてはまる現代語訳として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 少しも イ たいへん
ウ おそらく エ おかしな

問六 線a「見つつ」、b「人馴れつつ」、c「うち臥したり」の動作主として最も適当なものを次のうちから選び、それぞれ記号で答えなさい。（同じ記号を何度使ってもよい。）

- ア 侍従の大納言の御女 イ 作者
ウ 姉なる人 エ 猫

問七 古文中に「」（カギ）を付けられる会話文が一か所あります。その初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

練習問題

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

① 朝夕へだてなくなれたる人の、ともあるとき、われに心おき、ひきつ
くろへるさまに見ゆるこそ、「今さらかくやは。」など言ふ人もありぬべ
けれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。③
うとき人の、うちとけたることなど言ひたる、また、よしと思ひつき
ぬべし。④

(兼好法師『徒然草』)

〔現代語訳〕

ふだん何の隔^{へだ}てもなくなれ親しんでいる人が、どうかした時に、私に
気を遣^{つか}って、改まった態度に見えるのは、「今さら改まって、そんなにし
なくても。」などと言う人もきつとあるだろうが、やはりまじめで教養の
ある人だなあと□。

(また) ふだんあまり親しくない人が、うちとけた話などしたのは、
これもまた、りっぱだと心ひかれるにちがいない。

5

問一 線①「朝夕へだてなくなれたる人」とありますが、これと反

対の意味を表す言葉を古文中から四字で書き抜きなさい。

問二 線②「かく」の指している内容を、古文中から九字で書き抜

きなさい。

★ 問三 線③「おぼゆる」の現代語訳として□にあてはまる最も

適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 記憶^{きおく}する イ 思い出される

ウ 思われる エ 思いつく

★ 問四 線④「よし」の現代語訳にあたる言葉を書き抜きなさい。

★ 問五 線⑤「やはり」は、古文のどの言葉の現代語訳ですか。古文

中から書き抜きなさい。

2 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのままに言はんはをこ
がましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたる、よからぬことなり。
知りたることも、なほさだかと思ひてや問ふらん。また、まことに知
らぬ人などかなからん。うららかに言ひきかせたらんは、おとなしく
きこえなまし。

(兼好法師『徒然草』)

〔現代語訳〕

人が何かを尋^{たず}ねた時に、まったく知らないということはあるまい、あ
りのままに答えるのはばかげていると思うのであろうか、□の(心)
を迷わすように返事をしているのは、よくないことである。知っている
ことでも、なおいっそうはつきりと(知りたい)と思って尋ねるのかも

5

しれない。また、ほんとうに知らない人もきつというであろう。(だから)はつきりと説明してやるのが、思慮しりょ分別がある答え方に聞こえるであろう。

★問一

線①「知らずしもあらじ、ありのままに言はんはをこがまし」とありますが、このように思うのはだれですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 世間の人々
- イ 質問をした人
- ウ 作者
- エ 質問をされた人

★問二

線②「かへりごと」を現代かなづかいに直して書きなさい。

問三

線③「よからぬことなり」とありますが、それはなぜですか。その理由を述べている一文を古文中から二つ書き抜きなさい。

★問四

線④「さだかに」の現代語訳にあたる言葉を五字で書き抜きなさい。

★問五

にあってはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 世間の人々
- イ 質問をした人
- ウ 作者
- エ 質問をされた人

問六

この文章について解説した次の文章の a c にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、それぞれ記号で答えなさい。

この文章は、『徒然草』の一節である。作者の兼好法師は、人の a に対して、 b 答え方をするのはよくない、と説き、人間どうしの社交上の c について述べている。

- | | | |
|-------------------------|----------------------------|---------|
| a | b | c |
| ア あいさつ | ア あいまいな | ア おもしろさ |
| イ 質問 | イ 一方的な | イ 優しさ |
| ウ 訪問 | ウ おおげさな | ウ あいさつ |
| エ 疑惑 <small>ぎわく</small> | エ 間違 <small>まちが</small> った | エ 心がまえ |